

がん教育に関する 当事者の意識調査 (2)

～がんの親を持つ子どもの立場から～

井上実穂(国立病院機構 四国がんセンター)

小林真理子(放送大学大学院臨床心理学プログラム)

白石恵子(国立病院機構 九州がんセンター)

小嶋リベカ(国立がん研究センター中央病院)

大沢かおり(東京共済病院／NPO法人Hope Tree 代表)



研究目的

第3期がん対策推進基本計画に「がん教育の推進」が盛り込まれ、「子どもに対しては、健康と命の大切さについて学び、自らの健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識をもつよう教育すること」を目指し、2020年よりがん教育の実施が始まった。

一方で、がん体験者(患者家族)の子どもへの配慮については、子どもの思いをくみ取ることができていない。

本研究では、がん教育に関して、当事者であるがんの親をもつ子どもの経験や意識を把握し、望ましいがん教育について考えることを目的とする。

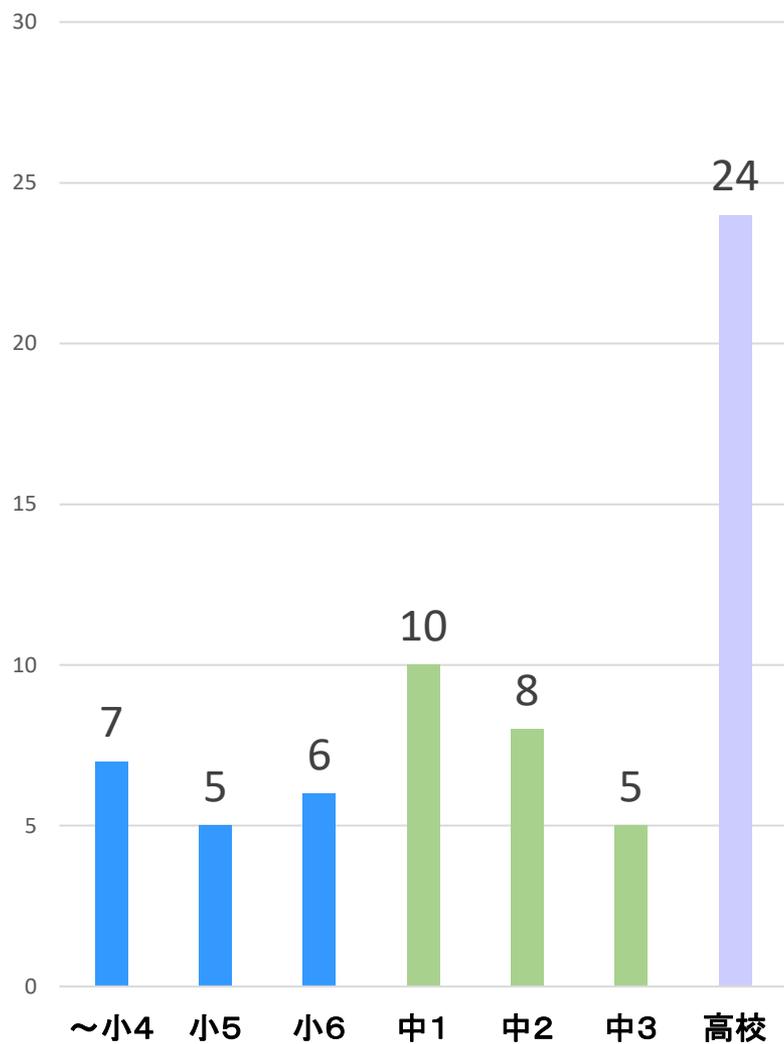


方法

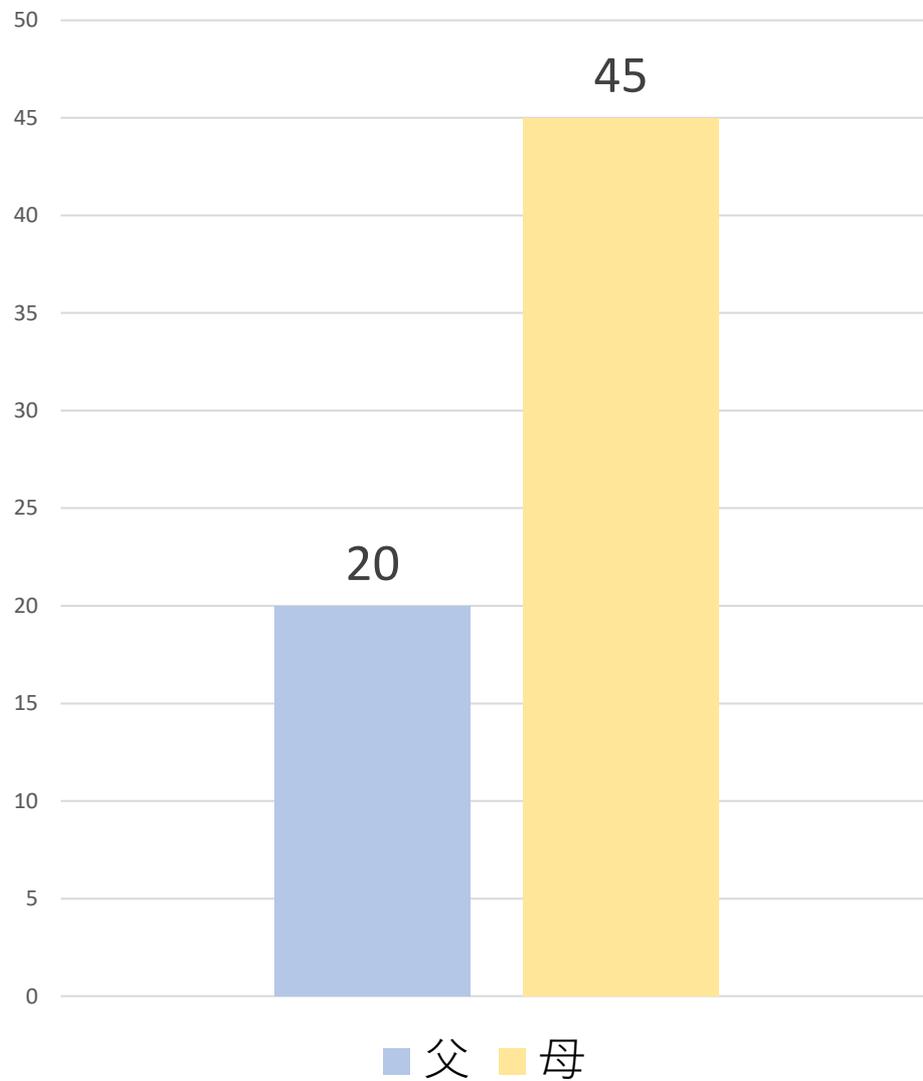
- 調査対象：がんの親を持つ小学4年生から高校生までの子ども
- 調査方法：NPO法人HopeTreeのサイトおよび患者会等を通して募集し、保護者の承諾を得て子ども用アンケート(小学生版／中高生版)を親アンケートと共に郵送
- 調査項目：がん教育受講時の気持ちや考え、必要性など、自由記述を含む10問
- 倫理的配慮：調査は無記名。放送大学研究倫理委員会の許可を得て実施
- 調査期間：2020年2月から2020年9月
- 配布数、回収率：小学生版71通、中高生版71通が配布。それぞれ21名と44名分が回収(回収率30%、62%)。



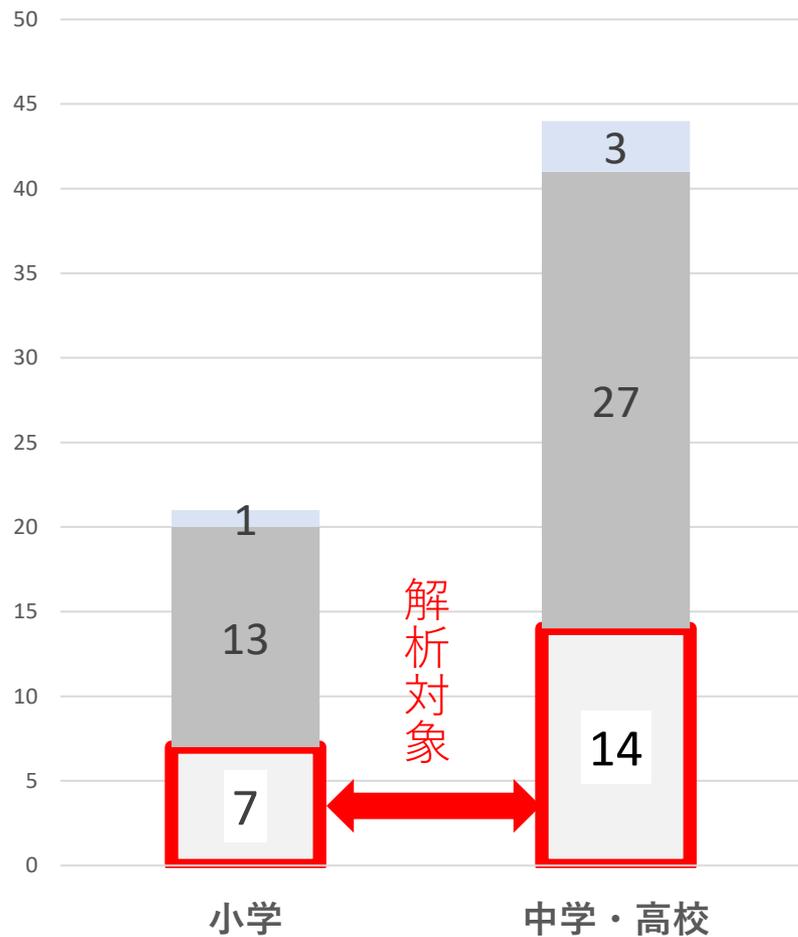
回答者学年



患者性別

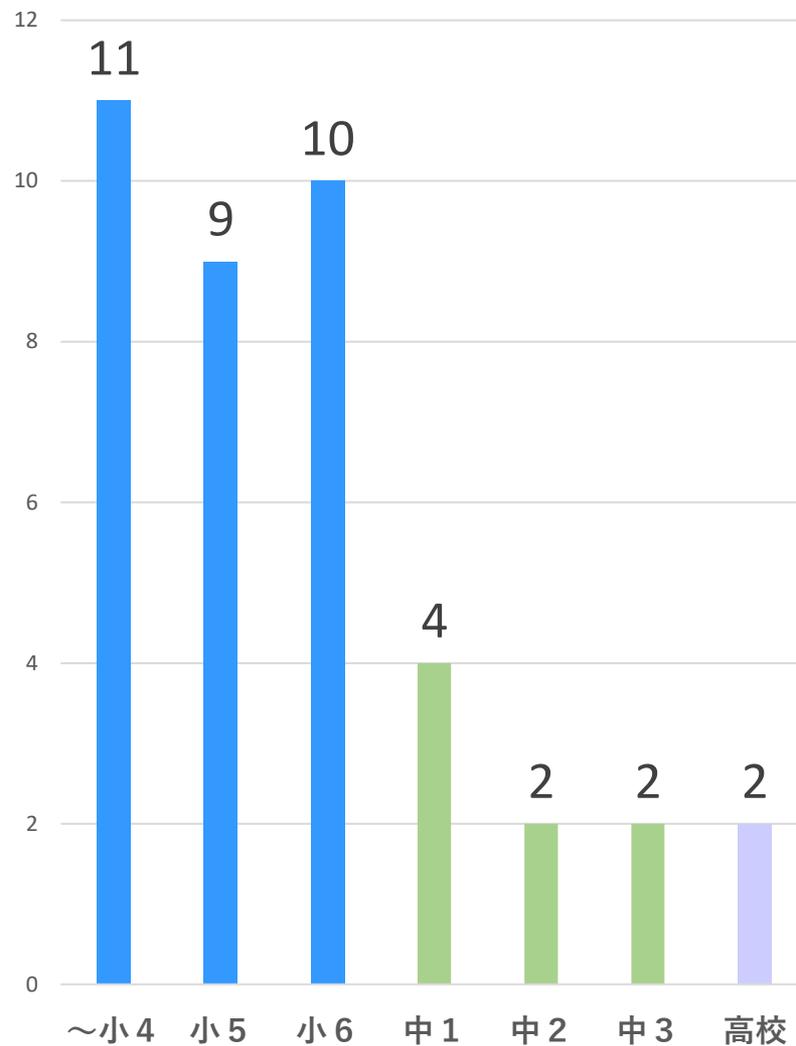


がん教育経験

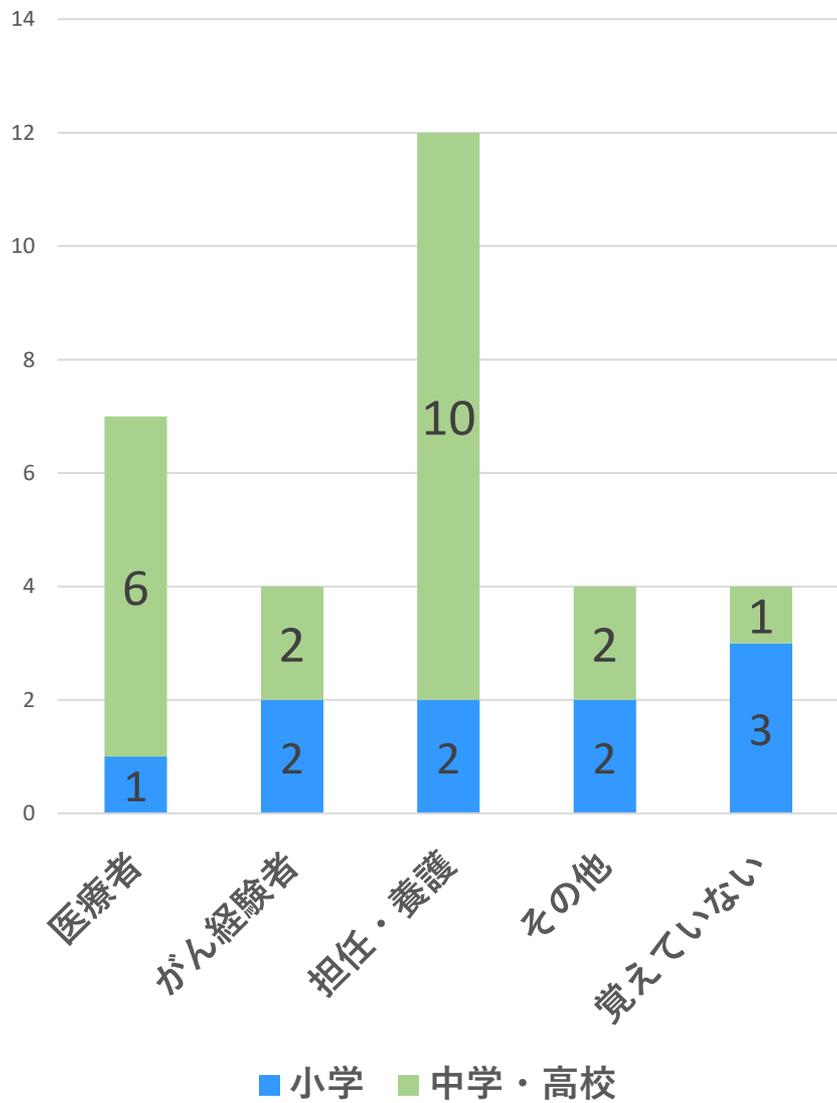


■ 経験あり ■ 経験なし ■ 経験未回答

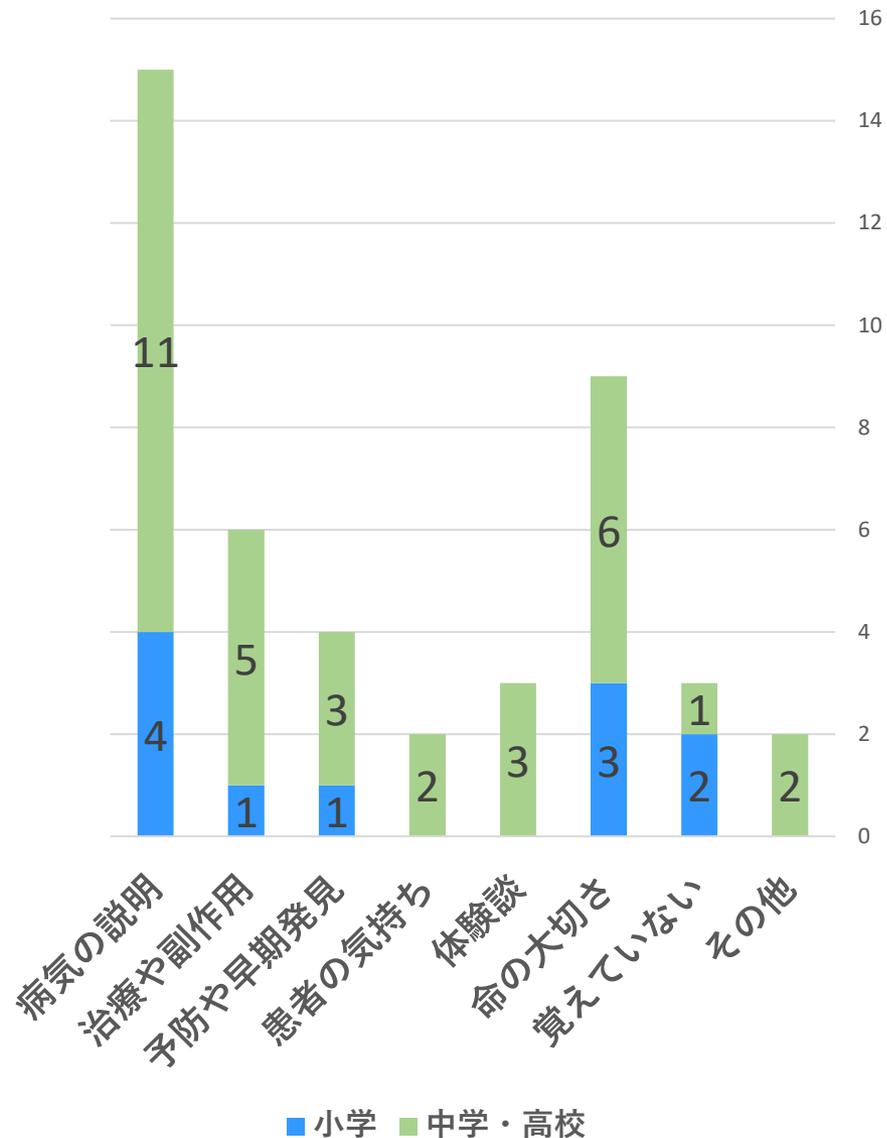
いつ受講したか (複数回答)



授業担当者 (複数回答)



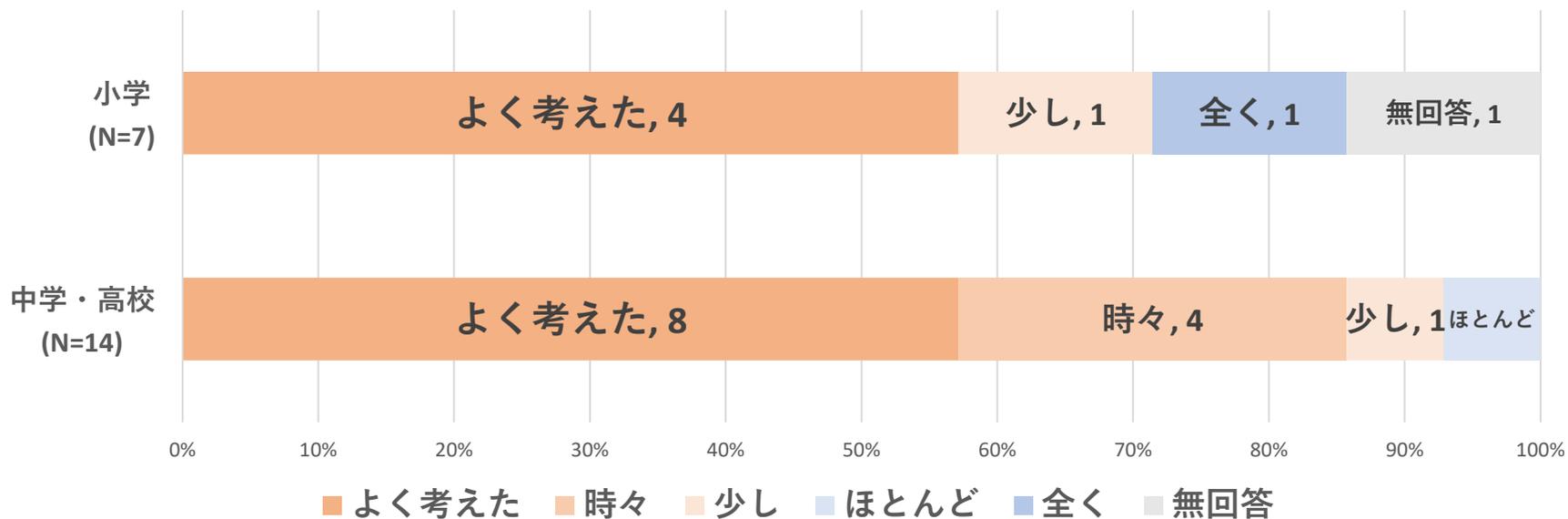
授業内容 (複数回答)



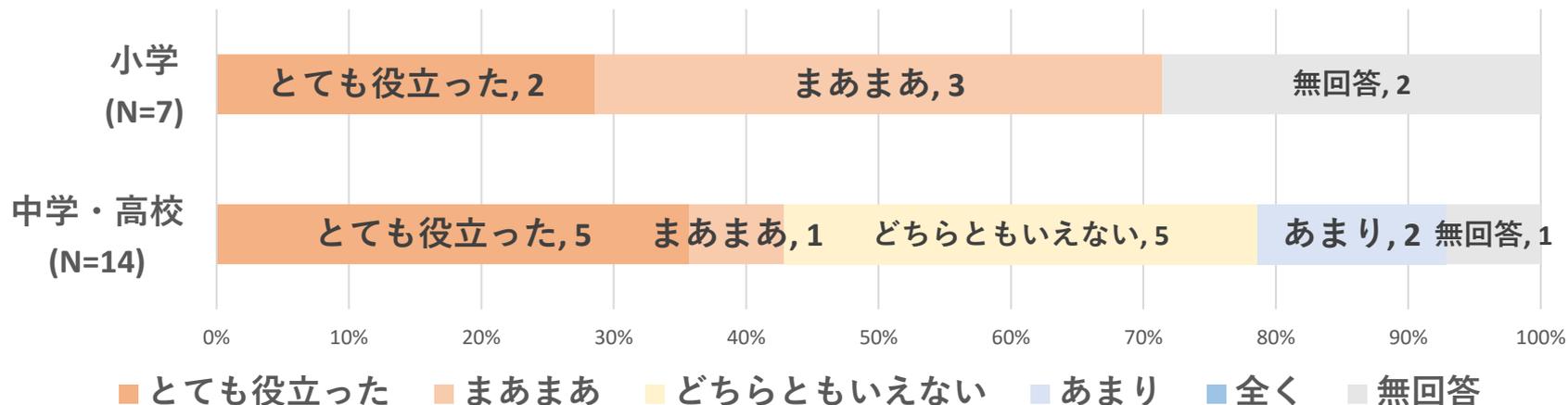
授業後の気持ち (複数回答)



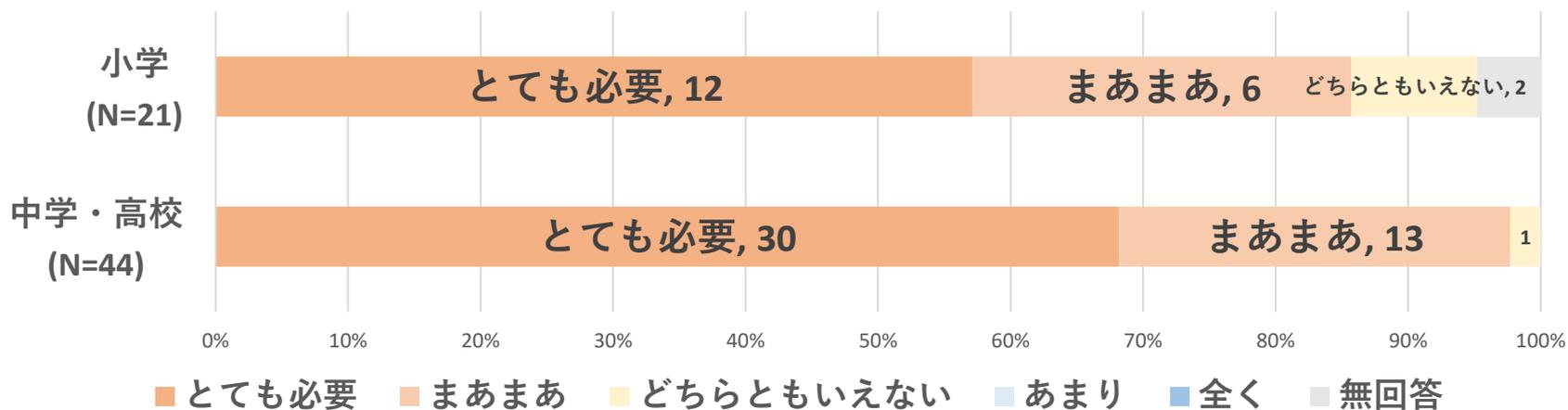
親のことを考えたか



がん教育は役に立ったか



がん教育は必要か (全回答者)



結 果 (量的分析)

- 授業担当者は、多い順に教員、医療者
- 授業内容は、病気の説明、命の大切さ(⇔患者の気持ち)
- 授業後の感想はネガティブな感情(怖い、不安、悲しい、辛い)と「もっと知りたい」という知的欲求がある
- 小学生に比して、中高生の感情は多様である
- 親のことを考えたのは、小学生約7割、中高生約9割
- がん教育が役に立ったと回答したのは、小学生約7割、中高生約4割
- がん教育が必要と回答したのは、小学生約8割、中高生約9割

がん教育が必要な理由 (自由記述 抜粋)

- がんは誰でもがなる身近な病気なので、もっと理解と認知が広がってほしいと思うから
- 社会全体で患者やその家族を支援するには、がんという病気への理解が必要だと思う
- 身近にがん患者さんがいない人は、がんのつらさを知らないから
- 自分やまわりの方ががんになったとき、どうすれば良いかがわかるから
- がんになっていない人も周りの人の支えになれるから
- 親の病気について知っておくことは、子どもにとって、親に対する気持ちの整理の助けになると思うから
- がんの親を持つ子どもにとって、がん教育は複雑で、自分の親を非難しているように聞こえるかもしれない。乗り越えてほしいという思いで、がん教育が必要だと思った
- インターネットでなく、正しい情報を得るため(がんについての授業でいい)

がん教育について（自由記述 抜粋）

- 予防に加え、がんになることが悪いのではなく、なってしまったとして、心身共に健康でいるにはどうしたらいいかなどを伝えるべき
- どんな病気かだけでなく、家族ががん患者になったら、どんなふうに生活が変わるかも教えるべきだと思う
- がんの親を持つ子どもがひとりじゃないと思えるような内容
- 子どもが不安や悲しみを抱えたままにならないようにしてほしい
- がんになった人の子どもたちの気持ちをもっと知ってほしい
- お母さんの病気の事を先生にも知っていてほしいです
- 「がんは生活習慣病」と授業で出たけど、お父さんはタバコもお酒もしないのにがんになっているし、ひとくりにしないでほしいです。また、「がんでも元気」とかいう人がCMに出てるけど、必ずしもそうじゃないので、「みんな違うんだ」ということをしっかり説明してくれる人に教えてほしいです
- 若い人が教えてくれたほうが、親しみやすいし、この先どう生きていくか、先輩としてアドバイスをもらえる

考 察

- 本研究において、親ががん体験者である子どもは、がん教育の**必要性を理解**している
- がん教育の内容、講師については、子どもの求めているものと**相違がある**ことが示唆された(必要性 > 有用性)
- 子どもは、親のがんを授業内容に照らし合わせるため、内容には整合性、全がん患者へのリスペクトが必要である
- 子どもは、がん教育に**がん患者家族への理解が深まる社会**になるよう求めている(個人的体験からより広い世界へ。親のがんを通じての学び。教育的効果)
- 本研究の限界については、親の同意下の子どもの認識であること、調査数の少なさなどが挙げられる



がん教育の今後に向けて

- がん教育には、予防、疾病・治療の知識、患者家族の生活面の3つの軸が必要。
- 授業内容は、がんの多様性やがん患者・家族の心理的、社会的側面などを含めるなど、がんの親と暮らしている子どもの生活に即したもの（＝当事者への配慮）
- がん教育は、**がんとの共生社会実現**への可能性



第26回日本緩和医療学会学術大会

COI 開示

演題発表内容に関連し、
主発表者及び研究責任者には、
開示すべきCOI関係にある企業等はありません。